シンポジウム報告

「ダンスとアート・ミュージアムとの出会い」

ー野外彫刻のある空間での身体表現活動ー

筑波大学　村田　芳子
岡山大学教育学部附属中学校　太田　一枝

岡山県倉敷市にある大原美術館では，教育普及活動の一環として，2002年より毎夏（8月の最終土日）に「チルドレンズ・アート・ミュージアム」を行っている。その企画の一つに「ダンスワークショップ―野外彫刻と遊ぼう―」がある。これは，野外彫刻が点在する芝生の広場において，彫刻からインスピレーションを受け，彫刻と直接身体で関わりながら即興的で自由な身体表現を行うものであり，参加者の反応が大きく，初年度から6年継続実施している唯一のプログラムでもある。

ここでは，このダンスワークショップの企画意図と実践の様子を紹介しながら，戸外のアーティスティックなトポスに触発され，新鮮な心身で身体表現を体験することの意味，すなわち「トポスとからだの関わり」が参加者にどのような可能性を拓くかについて報告する。

1．トポスとからだの関わり
ー何故この場で即興的な身体表現活動なのかー

この野外空間（分館前の広場）には，オーギュスト・ロダンやヘンリ・ムーアをはじめ著名な作家の彫刻作品が数多く設置されている。それぞれの彫刻には作者のメッセージや意図があり，また，視覚によって鑑賞する価値のあるものであるが，このワークショップでは，それぞれの美術作品から，視覚だけでなく，触覚や聴覚などの身体の持つさまざまな感覚を使って感じ取ったものを手がかりとして，自己の身体表現として表出させることを意図した。つまり，美術作品の鑑賞を身体表現活動によって行い，作品との関わりから自己を広げる活動を目指した。

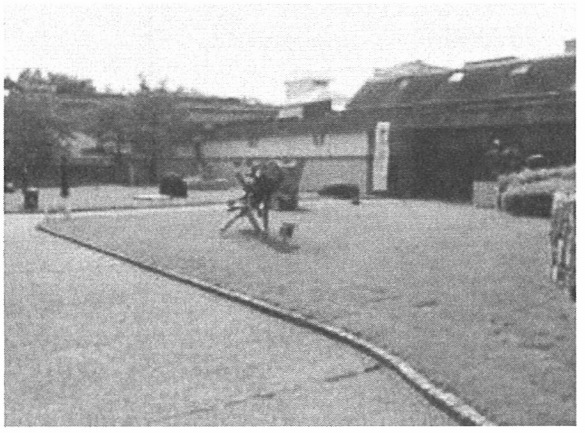

写真1　野外彫刻のある芝生の空間

このような点在する野外彫刻とともに，この場（トポス）に存在し，参加者の心や体を触発するものは以下のように考えられる。

○場との関わり
　野外、芝生、彫刻、太陽、空気、風･･･
○モノ（彫刻）との関わり
　立体、具象、抽象、材質、感触、温度、臭い･･･
　触れる、登る、抱きつく、隠れる、寝る･･･
○場を共有する人と人との関わり
　子ども、親子、スタッフ、見学者･･･

このダンスワークショップでは，これらの様々な関わりから触発され，五感で，からだで豊かに関わり合う活動として，即興的な身体表現の活動プログラムを中心に取り上げた。「いま，ここで，私と私たちが」新しく生成される即興的な身体表現こそが，この魅力的な空間（場）を「生きたからだ・トポスとの対話」に導いていくと考えたからである。

2．ダンス教育における「即興表現」の意味と可能性

「即興」の「即」とは「今この瞬間に，同時に」という時間性を，そして，「興」とは「内から湧く，生まれる」という内発性を示す言葉である。つまり，即興表現は，「踊る･創る」行為が一体となった活動であり，創造的な行為の最も自然で純粋な形態と言える。即興表現の魅力は，「いまこの瞬間に感じるままに踊る」新鮮さにあり，音・モノなどから触発され，他者とのコミュニケーションの中で偶然に生まれるひらめきや計算しない反応が，練り上げた作品とは異なる生きのよい表現を生み出す。また，初心者からプロまで，技術や経験の差を超えて個々の持ち味を生かせる幅をもった行為である。

学校におけるダンス教育においても，踊る行為自体の価値やプロセスを重視する考えから，近年即興表現が積極的に位置づけられ，即興表現と作品創作の2つを軸に学習内容が構成されている。こうした即興表現は，ダンスの創造的な学習を特徴づけるものであり，他のスポーツの学習とは異なる「探求型学習（ゴールフリー学習）」という学びのスタイルとして注目されている。

このワークショップでは，このようなダンス教育において実践されてきた「即興表現」の内容と方法を参考に，彫刻（あるいは彫刻のある野外空間）という手がかりを生かせるような内容を工夫

し，参加者がそれぞれに思いを広げながら思い切りからだで遊べるような即興的な身体表現の快感と気づきを促すことを意図してプログラムを構成した。

3. ダンスワークショップの実践報告

1）実施形態

スタッフとして，岡山大学モダンダンス部現役部員とその卒業生によるグループがこのワークショップの企画から運営・指導を担当している。1日に午前の部と午後の部1回ずつ，各回50分程度を基本として，全体進行役のワークショップリーダー1名と15人前後のスタッフによって実施した。スタッフは，参加者の活動の充実と美術作品の保全確保の両方に配慮しながら，参加者と一緒に即興的な身体表現を楽しんでいる。

参加者は幼児から小学生の子どもが中心であるが，最近では親子で参加するクラスも新設し，子ども同士とは違うまた新たな交流が生まれている。また，なるべく多くの参加者を受け入れられるように，予約制ではなく，当日のプログラム開始30分前に参加者を受けつけている。そのため，これまでの参加者数は，一回のプログラムに十数名から50人まで，実施年や時間帯によって様々であった。毎回，参加者人数や年齢層などによって，臨機応変に内容や方法を修正しながら行った。また，取り上げる活動内容も，参加者の反応を見ながら，修正を加えよりよいプログラムを模索している。

2）活動内容例

① 体ほぐし

この活動は，共に活動する参加者とスタッフとの関係をほぐすと共に，これから行う活動の心と体の準備としての意図をもつ。参加者とスタッフが手をつないで円形になり，体を揺らしたり，走ったりストップしたりするという簡単な運動を行った。（写真2）

② 彫刻かくれんぼ

この活動は，かくれんぼという遊び感覚の活動の中で，彫刻に隠れる行為に夢中になりながら，自然に体が彫刻と一体となり，いつの間にか彫刻を表現する体になることを意図している。隠れる際，隠れる彫刻の特徴をまねしてそっくりになっていたら見つからない。そして，彫刻から彫刻への移動の途中に鬼に遭遇した際，その場所でポーズ（架空の彫刻になること）を行えば，鬼には見つからないというルールで行った。（写真3・4）

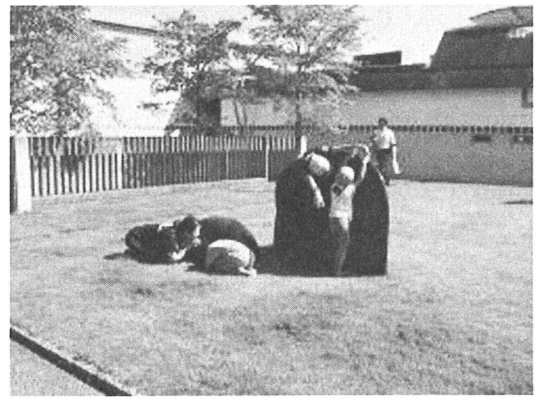

写真3　彫刻かくれんぼ①

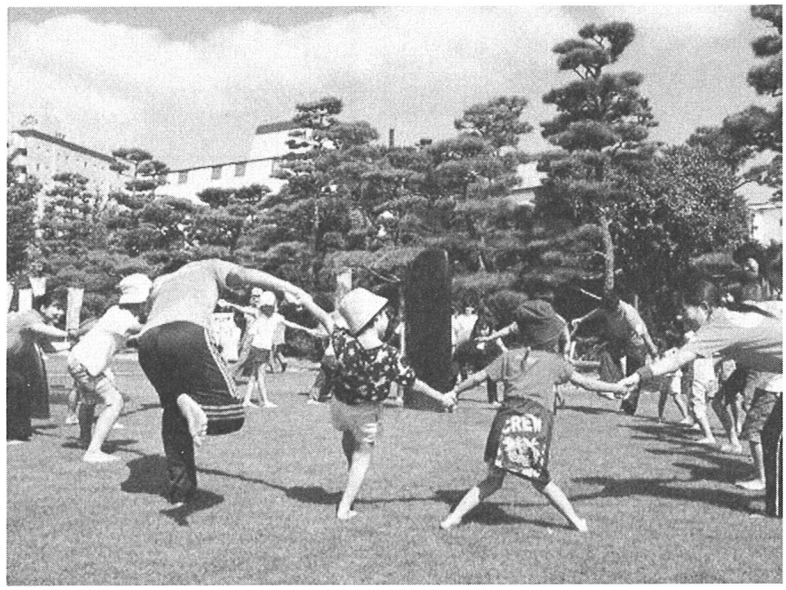

写真2　手をつないで体をほぐそう

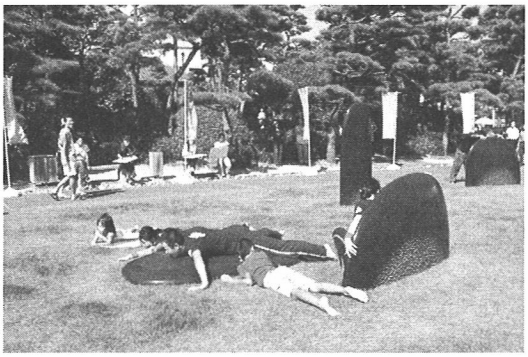

写真４　彫刻かくれんぼ②

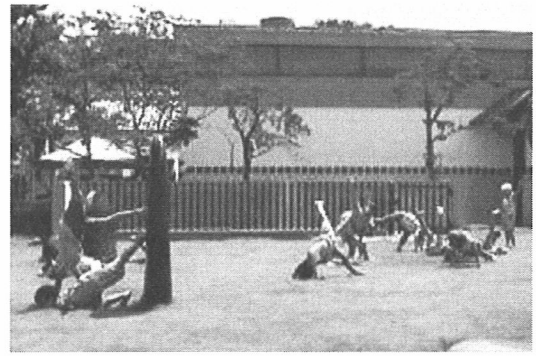

写真６　子どもたちが創った新しい彫刻

③「人間彫刻」新しい彫刻を創ろう

自分の体を彫刻にし，新しい彫刻を創る。はじめは，スタッフが創るポーズを参加者が体を触って直す。その後，その役割を交代し，参加者が思い思いのポーズをとり，そのポーズをスタッフが直し，新しい彫刻を創る。

この活動は，参加者がスタッフから自立し，それぞれの自由な発想による身体表現の表出を意図している。また，一人だけで彫刻を創るのではなく，参加者同士が２・３人で立体的に関わりをもって新しい彫刻を創ったり，参加者全員で１つの彫刻を創る活動も加えて盛り上げた。他者と体で直接関わることによって多様で複雑な形（身体同士の絡み）が生まれた。（写真５・６）

④「踊る彫刻」彫刻と踊ろう

実際の彫刻の形をまねたり，新しい彫刻になった自分の体が跳んだり転がったりして踊り出す。リズミカルな音楽とともに，参加者が彫刻や人と関わりながら，自由に踊り出した。

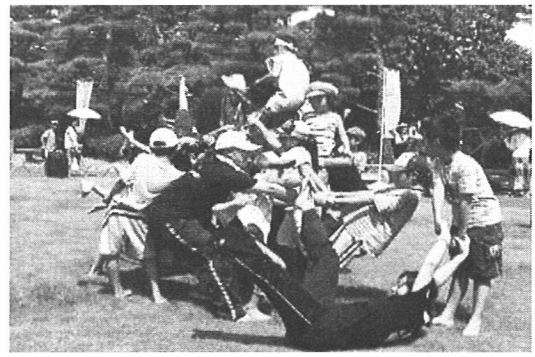

写真７　みんなで一つの彫刻に

彫刻を手がかりにすると，どうしても止まった形（ポーズ）が中心の活動になりがちで，ダイナミックな活動になりにくい。それを如何に連続感につなげていくかを工夫した活動である。この活動によって，彫刻から想像が広がって自分たちの主体的な自由な動きが生まれていった。

そして最後に，参加者とスタッフ全員が一つになり，大きな彫刻を創ってポーズを決めると，ギャ

写真５　「人間彫刻」スタッフの創るポーズが子どもたちによって創りかえられる

ラリーから自然に拍手が起こり，その中で，プログラムを終えた。（写真７）

３）参加した子どもたちの様子

ワークショップ終了後のインタビューやアンケートから，楽しかった活動として多くの参加者が「彫刻かくれんぼ」を挙げたことがわかった。また，スタッフの内省記録からも「彫刻かくれんぼ」の活動時から，「自分から率先して活動をはじめる」などの参加者の積極的な活動の様子が読み取れた。そして，開始時にはやや緊張した様子の参加者も見られたが，最後には，スタッフの手から離れた状態で活動を行うことができた。

参加した子どもの様子について，スタッフが話してくれた次の言葉が印象的であった。

「母親に手を引かれて途中から参加したあまりしゃべらなかった５歳の男の子に『どの彫刻が気に入った？』と聞いた。すると，『本物の！』と彼は答えた。偉大な彫刻家の作品より，自由に動き回れて形が変わる自分たちの彫刻の方がおもしろいのだと汲み取った。わずかに過ごしたプログラムの中で，彼のことがとても印象に残っている。」

また，毎年の実施を繰り返す中で，参加者の中にはリピーター（午前の部に参加した子どもが午後の部にも参加や毎年参加）も多く存在するようになった。

以下は子どもたちの感想の一部である。

○かくれんぼが楽しかった（小１男８歳男）
○彫刻と仲良くなれた（６歳男）
○彫刻が「暑いよー」と言っている（６歳男）
○彫刻が動いた（小４男）

４）参加者の家族の声

大原美術館2005年の「チルドレンズ・アート・ミュージアム」が実施した参加引率者への対面アンケート調査より，ダンスワークショップに関するコメントの一部を以下に挙げる。

○小３の子がダンスが好きで、これまでも毎回参加している。
○「彫刻と遊ぼう」に去年参加してとてもおもしろかったので、娘は１年後の今日をとても楽しみにしていた。
○午前中、ダンスに参加。下の男の子は今も時々彫刻になっている。
○記念になりそうな写真がたくさん撮れた。子どもはすっかりはまっている。また来る気になったようだ。

これらのコメントから，参加者だけでなく，参加者の家族の「ダンスワークショップ～野外彫刻と遊ぼう～」に対する好意的な態度が伺える。

４．まとめ

美術館という非日常の空間での身体表現活動

彫刻のある野外の空間におけるこのワークショップでは，即興的な身体表現活動だからこその体験を意図した。そこでの体験は，芸術作品を知的に理解するのではなく，個々のからだと感覚でまるごと作品と関わる体験として，受け身の鑑賞ではなく，芸術作品と交流する能動的な体験になったと思われる。そのことによって，参加者は，作品と一定距離を保ちながら視覚のみによって成し得る探求や発見とは質を異にする発見や気づきを経験することができたと考えられる。

この場での即興的な身体表現によって，前述したように，「場」との関わり，「モノ（彫刻）」との関わり，「場を共有する人と人」といった多様な関わりが実際に展開された。

この「トポスとの対話」で拓かれたものは，「感じるからだ（五感）」であり，「関わるからだ（開いている）」であり，そして，「創造するからだ（自由・生成）」であると考えられる。これは，トポスからの「インプット」から「アウトプット」への広がりでもある。逆にいえば，彫刻のあるこの野外の空間（場）が，このような「生きたからだ」を触発し，新たな発見につながったということができよう。

近年，様々な場面で子どもの心と体の異変について取り上げられている。このような危機的な状況にあって，学校教育の体育の学習に「体ほぐしの運動」が新たに導入され，他者との生きたからだによる触れ合いや関わり合いが「子どもの心と体，そして人間関係を変えた」という様々な実践が報告されている。

しかし，学校教育以外の家庭や地域においても，裸足になって走りまわったり芝生の上に寝転がったりするような身体活動を楽しめる場面や，仲間と体を通して交流できる場面，全感覚を研ぎ澄ました自分の体を通して気づき・発見するような場面を多く体験させていくことが必要である。さらに，芸術を知的に理解するだけでなく，研ぎ澄ました個々の感覚で芸術に触れることによって育まれることへの期待も大きい。

以上のことから，本報告で取り上げた大原美術館におけるダンスワークショップの取り組みは，子どもの豊かな体と心を育む教育への大きな可能性を示唆していると考える。

文献

大原美術館 教育普及活動この10年の歩み編集委員会（2003）「かえるがいる」．大原美術館 教育普及活動この10年の歩み，1993-2002，（財）大原美術館

村田芳子，川口啓，山本俊彦，五十嵐淳子編（2001）「体ほぐしの運動」活動アイデア集．教育出版．18-23，103-109

村田芳子編著（2001）「体ほぐし」が拓く世界 －子どもの心と体が変わるとき－．光文書院．

村田芳子編著（1998）最新楽しい表現運動・ダンス．小学館

太田一枝（2005）踊るからだへの働きかけ～創作ダンスの授業～．女子体育 47(6)．P.23

太田一枝（2006）野外彫刻のある空間におけるダンスワークショップの試み－大原美術館における教育普及活動の中での実践－．（社）日本女子体育連盟学術研究 第23号，75-85

齊正弘，村田芳子，森弥生，柳沢秀行（2007）チルドレンズ・アート・ミュージアム研究2．日本の文化政策とミュージアムの未来・ミュージアムの活用と未来，鑑賞行動の脱領域的研究，平成19年度報告書，7-25